

明治期の一人称代名詞「わたくし・わたし」

— 『社會百面相』を中心に —

房 極 哲

キーワード：明治期、社會百面相、相手のありかた、場面、待遇価値

0. はじめに

日本語の人称代名詞の用法には、種々の制限があることがよく知られているが、このことは待遇表現の研究上見逃してはならないと思われる。最近、待遇表現の研究が盛んになってきたとはいえ、明治期の人称代名詞に関する分析はいまだ不十分であることも事実である。

そこで本稿では、明治期の人称代名詞の考察の一環として、特に一人称代名詞「わ系」¹⁾を中心に考えてみる。「わ系」は古くから待遇価値に関して議論されており²⁾、また、今まで一人称代名詞の代表的な形式の一つとして存在してはいるが³⁾、待遇価値からは必ずしも詳細な考察がみられないのが現状である。本稿では、明治期の「わたくし」・「わたし」について考えてみたい。

本稿で取り扱う資料は、主に明治後期の小説『社會百面相』（明治 35）の口語文全体を対象とし、中期の「女學雜誌」⁴⁾（明治 21）と「太陽」⁵⁾（明治 28・34）所収の小説の口語文一部を参考として取り上げる。取り上げた作品は論文末の資料一覧を参照されたい。なお、本稿では「太陽」の文学作品に焦点をあてるときは、第一期（明治 28-35）を中心と考へて、明治 28 年の作品（巻 1）と、『社會百面相』所収の多くの作品が書かれたのと同時期の明治 34 年の作品（巻 7）の一部を取り扱うことにする。

本稿で取り上げる資料は、時期的に「言文一致」の多く試みられた明治 20 年代以後に刊行されたものであることがわかる。しかも人称代名詞からみた場合、方言的な要素があまり観察されず、また小説の内容が多様であるため「場面」と「話題」が充実している。したがって、待遇価値の相互関連性を検討する上で好条件を備えている貴重な資料であると思われる。

1. 「相手のありかた」「場面」「待遇の働き」

一人称代名詞はそれぞれ古くから個性豊かな表現性を帯びており、江戸期の場合でも約40種類が存在したと言われていた。その中のいずれを用いるかということは、使用者の年齢や性別、職業、教養度といった話し手側の問題だけではない。自分と相手との人間的、社会的な関係のありかたや、発話の場面を考えながら表現形式の選択を行わなければならない。このような人称代名詞を待遇の観点からとらえようとする場合、相手によってどのような使い分けが行われているのかを中心に検討することは重要であり、従来の多くの研究もそうであったと思われる。

ところが、「相手」以外の点でも、実際の言語表現はその表現と内容がはじめから固定した不変のものとしてあるのではなく、途中で変化する可能性が存在する。すなわち、「場面の変化」というものがあるわけである。言い換えれば、途中から介入する情報に対応してなんらかの変更を加える場合があるのであり、これらを文脈の場面状況から検討する必要が出てくる。

そこで本稿では、「相手のありかた」と「場面」の二つの要素を踏まえつつ、明治期の人称代名詞「わたくし」と「わたし」の用いられ方を「待遇の働き」⁶に対比させてみる。その結果得た結論から、それぞれの待遇性について論じることができると期待できる。さらに、同じ相手でありながら、話し手の何らかの要因によって一人称代名詞が変わる場合もあり得る。これらを考察することによって、一人称代名詞の関わりあいをも究明することが可能であると思われる。なお、一人称代名詞の分析では確かに話し手側の特性を具体的にみる必要はあるが、本稿では、「相手のありかた」と「場面」を中心に考えるため、話し手側の持つ性質に関しては深く立ち入らないことにする。

以下、本稿で扱う「相手のありかた」、「場面」、「待遇の働き」を示しておく。

(I) 【相手のありかた】：相手人物の持つ質的条件がさまざまであるが、大きく次の三つを取り上げる。

① 上下関係⁷、② 性別関係、③ 親疎関係。

(II) 【場面】(Situation)：場面構成要素は、場面定義の範囲をめぐってその幅が広いこともあり、多種多様である。しかし、そのすべてを網羅することは困難である。本稿では、その一端を扱ったものに過ぎない⁸。

① 改まり程度によって【公的場面・私的場面】

② 話題や状況によって【A、B、C場面】

A 場面：「依頼・要求」、「謝罪」、「断り」、「相談・交渉」

B 場面：「伝達」、「雑談・おしゃべり」

C 場面：「けんか」

(Ⅲ)【待遇の働き】：本稿では、「わたくし」と「わたし」待遇差、特に男女の区別をはっきりするため、大石(1974)の五分類⁷⁾を参考に、次の六つを考えることにした。なお、それぞれの名称は便宜的に付けたものである。

「敬意をあらわす働き」 = 「敬意性」

「相手を隔てる働き」 = 「隔離性」

「改まった気持ちを表す働き」 = 「格式性」

「やさしさ・丁寧さを表す働き」 = 「丁寧性」

「品位・教養を表す働き」 = 「品位性・教養性」

「皮肉・軽蔑を表す働き」 = 「無礼性」

ここで、特に話題や状況によって場面設定を「A、B、C 場面」の三つに限定して考えることにする。「A 場面」は話し手が相手に対して直接的な用件・話題などがあって、改まりの要求されがちな場合である。「B 場面」は「A 場面」のような直接的な用件・話題などはないが、相手との一般的な人間関係を保つために行われるごく普通の会話の場合である。「C 場面」はお互いに気軽に交わされるややくだけた場合である。

2. 先行研究の「わ系」人称代名詞の扱い

本論に入るまえに、先行研究の「わ系」人称代名詞に関する記述を簡単に概観してみる。「わたくし」と「わたし」を中心にその待遇価値についての考察を紹介すると、概ね以下のとおりである。

湯澤(1954:85)は、江戸後期の江戸語に関して、「現在と同じく、「わたくし」は最も改まった場合の語であり、「わたし」はややくだけた場合の語である」と述べている。

池上(1963)は、江戸語資料として人情本における待遇表現のうち、一・二人称代名詞がどのように用いられているかを調査している。その中で、以下のような記述がみられる。

「わたくし」の場合、相手に対する敬意が極めて強く、江戸語の一人称代名詞としては男女両性を通じていちばん丁寧なものといってよい。表現内容について強いて言えば「わたし」の方が やや敬意が軽いような感じが無いでもない。

小松(1971:355-366)では、「わたくし」は、江戸時代を通していちばん高い敬意を表す自称であり、前期では「おまへ」、後期では「あなた」「おまへさん」と呼応する待遇価値を維持したとされている。また、「わたし」は、江戸前期には「わたくし」とほぼ同等の敬意を表し、江戸後期では「わたくし」につぐ敬意を持つ語であったと指摘している。

なお、田中(1983)にも小松(1971)とほぼ同じことが述べられている。田中(1983)は、

江戸末期（文化・文政）ごろの江戸語の敬意の度合いに関して述べており、江戸語の人称代名詞の中、最も敬意の高い場合のいい方に「わたくし」を、普通の敬語表現にみられるいい方に「わたし、わちぎ、わっち」、ごく軽い敬意のある場合のいい方に「わし、わたし、わっち」などをあげている。

上記の各先行研究をまとめると、江戸期の研究が中心となっており、江戸期の「わたくし」、「わたし」の待遇価値の実態の一側面が読みとれる。つまり、一人称代名詞「わたくし」がいちばん改まったいい方であり、「わたし」は「わたくし」に次ぐやや軽い敬意をもつ、くだけた語であることを物語っている。しかし、明治期の状況はこれらの指摘からは漠然としか理解できないと思われる。

また、これらの研究では、それぞれ待遇価値について論じてはいるものの、お互いの相互関連性に関する考察までには進んでいないと思われる。しかも、話し手と相手との関係に注目したため、必ずしも「場面」の分析が十分に行われてきたとはいえない。小島(1974:171-173)で、一人称代名詞の相互関連性に関する考察がみられる程度である¹⁰。

以上、江戸期の「わたくし」と「わたし」を中心とした先行研究について触れてみたが、これらを参考としつつ、明治期の一人称代名詞「わたくし・わたし」の待遇価値を確認していく。

3. 「わたくし・わたし」、「わたし・あたし」の関わりあい

3.0

一人称代名詞「わたくし」と「わたし」は「相手のありかた」によって使い分けられており、その待遇価値の差が認められるのが基本的な性質であって、多数の用例がこれに該当する。例えば、次の(1a,b) (2a,b)の用例をみると、話し手が相手によって使い分けを行っていることがわかる。したがって、(1a) (2a)の「わたくし」と(1b) (2b)の「わたし」は待遇の働きの違いが出てくる。すなわち、(1a)「わたくし」は話し手の「品位性・教養性」が、(2a)の場合は「丁寧性」が強いのに比べ、(1b)と(2b)の「わたし」からはそういう働きが弱い。(1a,b) (2a,b)では、基本的に話し手が「相手のありかた」を認識した結果、それに見合う「わたくし」と「わたし」が現れていると言える。従来、主にこういう視点から待遇価値が論じられたために、「わたくし」は改まった語であり、「わたし」はやや軽い敬意をもつ語という定義が行われたのだと思われる。

(1a)「第一、妾(わたくし)共は學校の女教員や基督教の女達と違ひまして、良人の身分

- がムりますから餘り端多ない事は出来ませぬ。」(貴婦人(上)、貴婦人→雑誌記者)
- (1b)「けれども貞子さん、妾(わたし)、困りましたワ、淑女會の功能書を饒舌つてる貴婦(あんた)が眞朱な顔をして出て来るんだもの。」(貴婦人(下)、貴婦人→男爵夫人)
- (2a)「笑ひ事ツちやアありません、」「貴郎は氣樂ばかり云つてらツしやるが、妾(わたし)は齒痒くてなりません、之が學問も技倆も手蔓も無い人なら仕方が無いが、」(獵官(中)、若き妻・お秀→夫(中学校先生)・乾坤一)
- (2b)「だつて、阿母さん、いくら妾(わたし)がヤキモキ心配しても肝腎の當人が平氣でいたら仕様が無いぢやありませんか。」(獵官(上)、若き妻・お秀→母親)

ところが、「相手のありかた」だけでは待遇価値の解釈において十分ではない点がみられる。それは相手が目下の場合に「わたくし」が出現していたり、目上の場合に「わたし」が用いられていたりする場合である。この場合、勿論相手との親疎関係なども関わってくると考えられるが、「場面」「話題」などが強い働きかけをしているようである。(3)と(4)の場面は「要求・依頼」と「相談」の「A 場面」として認められ、「わたくし」と「わたし」が使用されたのではないかと思われる。

- (3)「感慨話は感慨話として今度は私(わたく)しの為に曲げて犠牲となつて下さらんか。勿論節操を曲げて呉れといふては無理になるが、貴所も元來は國有論者ではないか。」(鐵道國有(6)、大山外・県會議員(50代)→高浪崩・代議士(40代))
- (4)「迎も妾(わたし)の學力では直ぐ英文學科へ入れやしませんよ。」(略)「貴姉はお出来なさるから……」(女學者(上)、若い女→女學者)
- (5)「貴婦、規則書を御覽なすつて—無論お入りなさるんだから御覽なすつたでせうが、妾(わたし)、あの課目表を見たら馬鹿々々しくなりましたワ。」(女學者(上)女學者→若い女)

特に(3)は、50代男性(県會議員)が目下の相手(40年代議士:親戚関係)へ使用した「わたくし」である。この場合、外的条件(長幼主従)に基礎を置くものではなく、話し手の相手に対する主観的な待遇が「わたくし」の使用に反映されたのではないかと思われる。つまり、ここには何らかの「力の関係」が内在しており、改まった気持ちである「格式性」が存在しているのではないだろうか。他の一人称代名詞を用いてもおかしくない人が「わたくし」を使用する場合というのは、相手に「依頼・要求」をするような社会的な「力の関係」が存在するためであろう。すなわち、このような「わたくし」の使用は場面構成要素が人称代名詞「わたくし」を自然に要求した結果であると思われる。

一方、女性の場合、用例(5)の「わたくし」のように話し手の「品位性・教養性」という待遇の働きが強いようだが、男性にみられる「格式性」という側面は殆どないともてよい。

以上簡単にみてきたように、「相手のありかた」以外に「場面」が関連していることは

重要である。特に「わたくし」と「わたし」の待遇表現の価値を明確に把握するためには「場面」の概念が必要である。以下、「場面」を中心に検討しつつ、「場面」によってどういう使い分けが行われているのかを具体的に分析し、相互の待遇価値を考えていく。

「場面の変化」という性質は一人称代名詞の使い分けにどういうふうに反映されているのであろうか。これには話し手が同じ相手に対して自分を指す一人称代名詞を変更させる場合が考えられる。まず、「場面の変化」によって変わる一人称代名詞の典型的な用例を次にあげてみる。

- (6a) 「呀、貴郎が春村さん、」「妾くし、貴郎の御作は大抵拝見しておりますから、既からお目にかかりたかったのです。」(破調(上)、加壽衛・美女→春村・書生)
「僕(ぼく)が春村蜂遊、何分何卒・・・」(春村→加壽衛)
- (6b) 「貴嬢が小生(わたくし)の恋を承認して下さるなら、貴嬢の胸の中の蟠根をお咄し下さい。小生、貴嬢の為なら生命を献げて、貴嬢の蟠根を解いて差上げませう。」(破調(中)、春村→加壽衛)
- (7a) 「御存じのとほり時子はあのくらい學問もありますし・・・、僕(ぼく)は婚禮するつもりです。」((さ)、3編、(上)、花房・若紳士→栗殻・若紳士)
「なるほど、」「もう御約束なされたのですか。」((同)、栗殻→花房)
- (7b) 「志かし、貴君、どうでしやう、僕(わたくし)が何人と婚禮する利害は。」((さ)、3編、(上)、花房→栗殻)
「それは私(わたくし)には何とも言えません。」((同)、栗殻→花房)

(6a)と(6b)は、途中からの情報に応じて一人称代名詞が変更された用例である。すなわち、(6a)の初対面の「挨拶場面」「B 場面」から(6b)の「求婚場面」という改まりの要求される「要求・依頼」の「A 場面」に場面が変化し、この際、一人称代名詞が「僕」から「小生(わたくし)」へと変更されている。(7a)は「伝達」の「B 場面」の「僕(ぼく)」から(7b)の相手をやや皮肉「C 場面」の「僕(わたくし)」に変わったのである。したがって、(6b)と(7b)の「わたくし」は「場面の変化」とともに待遇の働きの顕著な違いがみられる。以下では、「場面の変化」に伴う「わたくし」と「わたし」の待遇の働きの差異を考察してみる。

3.1 「わたくし・わたし」

一人称代名詞の使い分けに関して、話し手の相手に対する待遇の働きの差異が容易に読みとれる場合は問題にならない。これは話し手が何らかの要因によって相手を意識し、その意識の反映が一人称代名詞を選択させる場合である。これは、とりわけ相手に応じた性質と大きく関連している¹⁾。

しかし、相手が同じで、かつ使い分けがされている場合は問題となる。そこで、場面の構成要素・変化を緻密に分析する必要が出てくる。こういった観点から「わたくし」と「わたし」の明確な待遇の働きが区別可能ではないかと期待される。以下、話し手が同じ相手でありながら使い分けて用いられている「わたくし」と「わたし」の用例を取りあげて検討し、これらの相互関連性及び待遇の働きの相違を確認していく。

- (8a) 「崩さんは妾（わたく）しどもが這般に困つて手を下げて頼むのを承知して下さいとサ。ねエ、お岸さん、餘りぢやアないか。……」（鐵道國有（5）お峰・姉→お岸・妹）
- (8b) 「貴婦も口の先は巧いけれども、……」「貴婦も家にゐた時分は兄さんにも妾（わたし）にも柔しかつたが、なんぼ良人に付くが婦女の常だからつて、口先ばかり巧い事を云つて餘り薄情過ぎる……」（同、お峰→お岸）
- (9a) 「モシ、あなた、妾（わたくし）はあなたにお聞き申したいことがあるの、妙な事です、アノあなたは世の中に何が一番残念な事とお思ひなされるの、」（（都）、1（下）、八重・乙女→松葉新一・法律学校生徒）
- (9b) 「エ、お八重さん何ぞ面白い話はないかね。御主人公がいつでも沈黙主義だから困る。」（（都）、1（下）、松葉新一・法律学校生徒→八重・乙女）
「妾（わたし）なんぞが、なんの面白い話があるものですか。けふは上野にお花見にいらしやつたのですか。」（（同）、八重→松葉新一）
- (10a) 「氣の無い御返辞ですね。御否?」（（さ）、4編、花房・若紳士→時子・淑女）
「でも有りませんけれど・・・貴下と妾（わたくし）とたつた二人ぢやア……」（時子→花房）
「ようムいませア。いらっしやいよウ。」（花房→時子）
- (10b) 「御心配申してつまらない事を申したのですよ。志かし、花房さん、御話は違ひますが、みづから重んぶるといふ事は妾（あたくし）は人間が世を渡るための梶だらうと思ひますわ。」（（さ）、4編、時子→花房）

上記の用例(8a)(9a)(10a)で「わたくし」が現れた場面を見ると、それぞれ「依頼」、「要求」、「謝罪・断り」などの「A 場面」である。一方、(8b)(9b)(10b)では「皮肉」、「雑談・おしゃべり」などのようなさほど改まりの要求されない「B 場面」と「C 場面」に「わたし」が現れている。このような用例を通してみると、「場面の变化」から待遇の働きの違いが認められよう。この際「A 場面」では「わたくし」、「B 場面」と「C 場面」では「わたし」が選択されることが多いようである。

しかし、下記の(11a)のように父親が娘を皮肉る場面で、娘が怒って口答えする対話場面(C 場面)がある。このような場合「C 場面」とはいえ、相手と距離を置くために心的な隔たりが「わたくし」に内在しているようである。このように話し手が相手に対して何らかの心理的距離感を示す際、場面が「A 場面」でなくても「わたくし」の方が選択される傾向があるのではなからうか。こういう意味で「わたくし」は、待遇の働きから「相手

を隔てる働き」「隔離性」が含意されており、「隔離性」の殆ど存在しない「わたし」とは区別されるのではないかと考える。また、(11b)のように「けんか」の「C場面」では「わたし」が用いられているが、くだけた語としての待遇的働きを考えれば、これは「無礼性」を表しているとみることができる。

(11a)「お前は嘸嬉しからうな」((書)、(二)、善平・父親：資産家→光代・娘)
「最う私(わたくし)は存じませぬ。」((同)、光代→善平)

(11b)「よう御座います。いつまでもお弄りなさいまし。父様はね、其様な風でね、私(わたし)なんぞの事もね、蔭では何んなに悪く言って居らつしやるか知れはしないわ。これからは私(わたし)ア最う、父様の仰有った事を眞實にしないからよう御座んす。」((同)、光代→善平)

なお、次の(12a)のように、改まりの程度からみて「わたくし」は「わたし」よりやや「用件」が重厚な印象がある。これは「一対多場面」のような演説調文で「わたくし」がよく使用される事実と合致するとみられる¹²⁾。言い換えれば、これは公的な場面で使用される「わたくし」と見なされてよい。これに対して(12b)の「わたし」は公的な印象はなく、気軽に用いられることから「わたくし」とは異なる性質をもっていると考えられる。

(12a)「皆様の御信切、なんとお禮を申さうやら、有がたう存じ上げます・・・夫に付ても松庵さま、私(わたくし)の病氣は手重い肺病、とても愈りは致しませぬ。此分では遠からぬ中に死ますと自分で覚悟を致して居ります。」((夜)、(上)、病婦婦人・お綱→小池松庵・医師)

(12b)「ナニ案じる事は無い、今日は少し熱も降つて快やうだから、此分で往けば今に原の通りに成るよ。昨日も余(わたし)の先生が(吉澤玄齋を指して言ふ)御診察下すった時に仰しやった通り、此病氣は決して氣落をしては成りませぬ。」((夜)、(上)、病婦婦人・お綱→小池松庵・医師)

以上みてきたように、「わたくし・わたし」の待遇の働きをはっきり判断することは困難ではあるものの、「場面の変化」という点に着目してみると、以下のようなことが確認できると思われる。

「わたくし」は殆ど「A場面」で現れていることがわかる。すなわち、「依頼・要求」「謝罪」「相談」などの改まった場面で「わたくし」の使用の主流をなしている。また「けんか」「皮肉」のような「C場面」でも相手を隔てる働きをする「隔離性」が存在する場合には「わたくし」が選択される。さらに、演説など改まり程度が強い「公的な場面」として見なされる「一対多場面」でも「わたし」より「わたくし」の方がよく選択されているとみられる。

一方、「わたし」は「わたくし」の場面より「改まり」の要求されない場面で現れ、普

通「雑談」「おしゃべり」のような親しみが反映されがちな「B場面」でよく用いられている¹³⁾。したがって「わたくし」と「わたし」は、場面によって使用の領域がほぼ決まっており、その重なりあう領域というのは、話し手の相手に対する心理的な要因と「話題・用件」に起因するのではないかと思われる。

すなわち、「場面の变化」から捉えた場合、「わたくし」は話し手の改まりという場面意識が内在している際、暗示的に使わなければならないという心的制限があるのではないかと思われる。これに対し、「わたし」はそういう制限があまりみられないため、気軽に選択される性質を持っているとみなされる。

このように場面に関わる諸側面からみた結果、場面役割を担う「わたくし」「わたし」相互の機能分担は大体区別されてはいるものの、必ずしも一線を画すことのできないのが現状であると言える。これは夫婦関係の会話で、妻が夫に対して、「わたくし」と「わたし」を使用する傾向が夫婦毎に多様であり、一概にいけないことと同様であろう。今までみたように「わたくし」と「わたし」の待遇差異におけるいわゆる境界の部分は複雑に存在しているが、その待遇の働きについては場面を通して予測可能であり、その傾向を指摘できたと考える。

3.2 「わたし・あたし」

次の用例から「わたし・あたし」の関わりあいについて簡単にみてみたい。

- (13a) 「あら、妾(わたし) 鱈尾さんと何にも関係がありやアしないワ。あの方は、大海屋の鮫子さんと御親類筋だワ。」(教育家(下)、女中→風通紳士)
「汝(おまい)も悪戯をされたんだらう。」((同)、風通紳士→女中)
- (13b) 「あら嫌だワ、あんなお老爺さんに。妾(あたし) なんか、貴客(あなた)、どうせ人三化七ですもの、関係者なんぞ有りやアしませんワ。」(同、女中→風通紳士)
- (14) 「先ア／＼宜エってことよ。解つた、解つた。お前のやうに爾うガン／＼云ふと酔が醒めて耳が遠くなつて了う哩……」(精神家(下)、精神家→夫人)
「お氣の毒ですね、妾(あたし) は口喧しうござんすから。お花が帰つて来たからシンネコに鳥の突つき合でもなさいまし、妾(わたし) はお湯にでも行つて外して上げませう。」((同)、精神家夫人→精神家)
- (15a) 「阿父さんその後どうですか、妾(わたし) は兒玉さんのところへ行つて様子を聞きたうございますが。」((さ)、10編、時子→父親)
- (15b) 「全体これはあの兒玉さん(探偵掛の名)の、何か、指揮ぢゃムいませませんが、ねエ? 妾(あたし) もあの時一寸左様思ったのですが、ねエ、あの方は大変に花房さんを瞻詰めて居ましたよ。」((さ)、7編(上)、時子→父親)
- (13b)の「あたし」は、風通紳士が女中に対して皮肉をいう場面「C場面」で、その風

通紳士に対する口答えとして用いられた例である。これは普通は「わたし」を用いていた女中が、相手にやや甘える気持ちで使う用例である。(14)は、精神家夫人が夫に対して普通は「わたし」を用いているが(8例)、怒っている「けんか」のような「C場面」で「あたし」を用いた(1例)ものである。

次に(15a)と(15b)の場面をみると、「わたし」は「依頼・要求(許可)」の「A場面」、「あたし」は「おしゃべり」の「B場面」で用いられている。したがって、「わたし」の方が「あたし」よりやや改まった場面に現れる傾向が認められ、強いて待遇の価値を判断するならば、「わたし」の方が「あたし」より多少改まった印象がするのではないと思われる。

4. 『社会百面相』における「わ系」一人称代名詞

4.0

まず、『社会百面相』に現れる一人称代名詞を用例数<表1>及び使用者数<表2>に示しておく。

<表1>一人称代名詞の用例数

一人称代名詞 性別	ワ タ ク シ	ワ タ シ	ア タ シ	ワ シ	ワ ッ シ	オ レ	オ ラ	オ イ	僕	我輩	拙者
男	85	1	0	57	16	46	1	2	133	305	13
女	91	151	3	0	0	0	0	0	0	0	0

<表2>一人称代名詞の使用者数

一人称代名詞 性別	ワ タ ク シ	ワ タ シ	ア タ シ	ワ シ	ワ ッ シ	オ レ	オ ラ	オ イ	僕	我輩	拙者
男	14	1	0	4	1	8	1	1	26	23	4
女	8	21	3	0	0	0	0	0	0	0	0

上記の<表1>から一人称代名詞の種類(男10,女3)、及び用例数が把握できる。<表2>からは使用者数が確認でき、特に女性は全体一人称代名詞の中で、「わ系」しかみられない点が注目される。ここで本稿の焦点である「わ系」を用例の多い順からみると、男性は「わたくし」85、「わし」57、「わっし」16、「わたし」1例である。女性の場合「わ

たし」151、「わたくし」91、「あたし」3例が出現している。統計結果から「わたくし」は男女ともに多く用いられていることがわかった。一方「わたし」の場合、女性の方に圧倒的に現れており、男性はわずか一人しか観察されなかった。そして「わし」の場合、完全に男性のみに使用されていることが指摘できる。

上記の〈表1〉〈表2〉から、特に注目されるべき点を「性差」に着目して二つ取り上げる。一つは、女性が用いている一人称代名詞は、なぜ「わたくし」と「わたし」に偏っており、全体的に一人称代名詞の種類が少ないのか、という点である。もう一つは、男性が使用する一人称代名詞のうち、「わたし」の位置づけの問題である。すなわち、男性は女性に比べて一人称代名詞が多様であるが、女性に数多く現れている「わたし」がごく稀にしか現れてこないのはなぜなのか、という点である。

4.1 女性の使う「わたくし」と「わたし」

女性における一人称代名詞はその種類が制限されており、しかも「わたくし」と「わたし」の二つに偏りがみられる点について考えてみたい。これは女性が基本的に「わたくし」と「わたし」を一般的な一人称代名詞として使用していたと認めてよい。しかし、だからといって、他の一人称代名詞が使用されなかったとは考えられない。では、「わたくし」と「わたし」が多く選択された原因はどこにあるのか。これに関しては、資料『社會百面相』の性質から鑑みて、以下の三つの点が考えられるのではないかと思われる。

- ① 登場人物の位相からみて、中流以上の階層の人が殆どを占めている点。
- ② 作品が啓蒙・時事的な性格が強い点。
- ③ 言文一致の影響及び義務教育の発展による共通語の普及という点。

一つは、登場人物の位相の問題であるが、登場する人物の身分をみると、中流以上の人々が殆どを占めている。この現象は当時の口語文典の記述とほぼ一致すると思われる。すなわち、「わたし」についてみると、松下大三郎の『日本俗語文典』（明治34）における「自称の説話代名詞「ワタシ、ワタクシ、ワシ、オレ、拙者」などこれなり。この中「ワタシ」最も普通なり。（一三頁）」という記述と保科孝一の『日本口語法』（明治41）における「「ワタシ」：現在東京の中流社会に、専ら使用されておる人代名詞の一つ。（六五頁）」という定義からもこの事実は裏付けられる。

もう一つは、作品構成・内容ということが考えられる。つまり、内田魯庵が『社會百面

相』序で述べているように、時代精神の反映ともいう「啓蒙・時事小説」の性格が強い点である。このため、女性の嗜みから判断してみても丁寧な表現が意識され、一人称代名詞の場合は待遇価値の高い「わたくし」と「わたし」が多く現れたのではないかと考えられる。

最後に、当時は文壇の方面で言文一致の運動が盛り上がってくる時期である。また義務教育の発展による共通語の普及の推移から推察してみると、規範性をもつ表現を駆使したと思われる。その結果が「わたくし」と「わたし」に投影されたのではなかろうか。これは当時の小学校の読本などの口語体に「わたくし」と「わたし」が標準の形として多く出現していることにも反映されているとみられる。したがって、中流以上の女性の間では、規範性を持っている「わたくし」と「わたし」が望ましい表現の形であったと見受けられよう。

さらに、資料の性格以外に重要な側面として考えられるのは、当時の社会相である。つまり、女性の身分的な立場がどうであったかという問題が当然出てくる。これに関する詳しい検証は別の機会に譲ることにするが、階級制度の崩壊、四民平等という時代状況があるものの、取りあえず男性より女性は社会的に接する機会（場面）が少なかったと言われている。すなわち、女性の場合は男性よりも自分の意見を述べる場が整っていないため、自分の立場を示す一人称代名詞が簡単で済むのではないかということである。このような時代性から一人称代名詞の数の少なさは理解できる。また、もし自分の意見や主張などを述べる立場であったとしても、男性のような個性豊かな人称代名詞が存在するのではなく、「改まり」の要求されがちな身分的立場から「わたくし」と「わたし」が選択されたのではないかと考えられる。

4.2 男性の使う「わたし」

次に男性に出現した「わたし」について簡単に言及してみよう。

男性は多くの一人称代名詞を使用しており、その中で「わたくし」は85例あったが、「わたし」の場合はわずか1例のみであった。しかも女性と比べて顕著な差が確認できた（用例数、女151：男1）。つまり、性差の区別が明らかに存在しており、これは「わたし」の使用において何らかの制限があったのではないかと考えられる。塩澤（1998）では、「わたし」は女性語的性格が強い人称代名詞であり、男性も使うことはあるが、いずれも特殊な条件下での使用に限られていると言える、と指摘されている。また、当時の口語文典では、例えば、金井保三の『日本俗語文典』（明治34）で、「自称代名詞のうち、ワタシ・ア

タシ：おんなの用いる言葉。(六三頁)」という記述がみられる。ここからも、「わたし」に女性語の性格は強いことが窺えよう。このような傾向が『社會百面相』でも同様に言えると思われる。男性が使用した「わたし」をみると、次の例(16)がある(1例)。

- (16)「イヤ私(わたし)のは白銅の方かも知れない。日置さんの髪は赤ツちやけているが矢張金色でムるかナ？」(投機(4)、金富醇次郎(商売人)の伯父→秋場(横浜商店の番頭)と一座の人：近親関係)

(16)の場合、「雑談・おしゃべり」の「B場面」で用いられた例である。相手が近親関係なので、親愛感をもって気軽に使われている。しかし、同時期の他資料で「わたし」の使用実態をみると、(17)夫婦関係とか(18)若い男女の間柄の例が存在する。こういう点から、男性が用いた「わたし」は、一概にはいえないが、いずれにしても「わたくし」とは異なる多少特殊な待遇の働きを担う機能を荷担しているようにみえる。

- (17)「お前さんの方ぢやアお知んなさるまいが、私(わたし)は、あの、生田へ東京相撲が掛かった時に、それ、お前さんも見物なすつたらう。」((東京)、(六)、神田の芳助→妻)
- (18)「いやお察し申して居るです。忙しいと言つて、なに其は其、那樣御遠慮は要らん事です。何しろ御存知の通り、兄様(にいさん)が逢つてくれなので、私(わたし)も実は手の付けやうがないのです。」((左)、(六)、吉倉廉三→鈴子・親友の妹)

4.3

以上「相手のありかた」と「場面」を中心として「わたくし」と「わたし」について考察した。その結果に基づいて、待遇性の傾向を表で示すと、おおよそく表3>のようになるとと思われる。

<表3>「わたくし」と「わたし」の待遇性(働き)¹⁴⁾

待遇性(働き)	人称代名詞		ワタクシ		ワタシ	
	性	別	男	女	男	女
敬意性(敬意を表す)			+	+	±	±
隔離性(相手を隔てる働き)			+	+	-	-
格式性(改まった気持ちを表す)			+	+	-	±
丁寧性(やさしさ・丁寧さを表す)			±	+	±	±
品位・教養性(品位・教養を表す)			±	+	-	-
無礼性(皮肉・軽蔑を表す)			(-)	(-)	(-)	(±)

5. 結びと今後の課題

以上明治期の一人称代名詞「わたくし」と「わたし」について、その待遇価値と関わりあいを中心にみてきた。この際、「相手のありかた」以外に「場面」という概念を根幹として考察を進めてきた。分析の結果、「わたくし」と「わたし」の相違点や類似点などを的確に把握することは困難ではあるものの、その傾向を示すことはできたと思われる。特に、「相手のありかた」だけでは解決できない部分を「場面の変化」から捉えることにより、相互の関わりあいの様子がより明らかになったと思われる。

なお、統計の結果注目された「わたし」の性差に着目し、男女における「わたし」の相違点について検討してみたが、まだ具体的な検証が必要な部分も多いので、これらを今後の課題の一つとしたい。さらに使用者側の問題だけでなく、「相手のありかた」と「場面」間の関連性を十分に考察する余地があると思われる。

<注>

*1 本稿では、一人称代名詞の「わたくし（あたくし）」「わたし（あたし）」「わし（わっし）」などの類を便宜的に「わ系」と呼ぶ。さらに、用例を分析する際、これらの区別の判断は「ルビ」と「送りがな」を両方考慮した。特に資料『社会百面相』の場合は殆ど人称代名詞にルビがついている。

*2 古くから本居宣長(1927:238)は、『古今集遠鏡』の「はし」のところで人称代名詞を取り上げている。たとへばおのがことを、うるはしくはわたくしといふを、はぶきてつねに、ワタシともワシともいひ、と述べており、早くから「わ系」が現れている。

*3 昭和27年「これからの敬語」(文部省)では、「わたくし」は「あらたまつた場合の用語」、「わたし」は「自分をさすことばの標準の形とする」などと規定されている。

*4 詳しくは青山(1966)、野辺地(1984)を参照されたい。

*5 雑誌の一般的性格については鈴木正節(1979)の研究があるが、鹿野(1961)が述べているように「商品であることを至上の課題」としたことから商業雑誌であることがわかる。さらに、鈴木貞美(1996:66)によると、雑誌構成からみて口語文体に近い小説、あるいはかなりくだけた漢文訓読体による家庭欄記事など、編集上の工夫はすべての記事をすべての読者に提供する姿勢ではなく、それぞれの読者が自分の関心と興味にあわせて選ぶことができるような紙面構成を心掛けた基本戦略を示すものと考えてよいだろう、としている。つまり、「太陽」は幅広い階層の人を考えた国民の大衆雑誌であることが窺えよう。

*6 人称代名詞を「待遇の働き」に照らし合わせることは、その「働き」が多様であるため、働きが重なることも多い。したがって、どの働きがより中心的であるかを判断することは困難である。

*7 ここで扱う「上下関係」の基準は、まず生得的属性の年齢関係を考え、次に社会的属性の階層・職業・地位関係を尺度とする。

*8 南(1974:145-146)は、「場面」を構成する要素として、「場所柄」「メディア」「目的・話題」などを取り上げている。このうち、「目的・話題」は、その時の言語活動の類型を質的にいちばんわかりやすくとらえるもの、としている。本稿では、南の云う以下の項目を参考としたものである。「おしゃべり」「伝達」「相談」「交渉」「依頼」「けんか」等。

*9 大石(1974)は、敬語の効果について大きく以下の五つをあげている。①あがめ、②あらたまり、③へだて、④品格、装飾、威厳 ⑤軽蔑、皮肉。

*10 小島によると、「わたくし」と「わたし」のあいだには、＜敬語としての差異＞のあるのが基本的な性格であるが、顕著なく敬語としての差異＞をみいだしにくい用例が散見するとしており、この現象は、話し相手に対する話し手の＜親疎の感情＞の、微妙なゆれうごきの反映による、と規定している。このように自称代名詞相互の＜かかわりあい＞というものを親疎概念という性質で究明しようとした点は示唆的であろう。

*11 但し、聞き手の存在しない場合、ていねい体が現れない側面があるために「わたくし」がみられず、「わたし」が現れているようである。仁田(1991)は、聞き手がない「独白」「心内発話」でていねい体が現れないことを述べている。また、野田(1998)の「心情文」がていねい形にならず、中立形になるのも聞き手が意識されないため、聞き手への働きかけがないためである、という指摘からもこのことは理解できよう。

*12 例えば、「女學雑誌」の演説文（「東京婦人矯風會演説録」明治20）で、「わたくし」は14例あるが、「わたし」はみられない。

*13 だからといって、「わたし」に「わたくし」のような「A場面」での用法がないというわけではない。あくまでも、程度の問題であって「わたくし」に比べて少ないということである

*14 この＜表3＞の「扱いの対象」の＋－±の程度をどのようにしてきめるかは問題になるが、＋－±などを単にどちらかと決めることをせずに、それぞれに程度を認める分析をする必要があるかもしれない。＜表＞の記号は、「扱い対象」の程度を示しており、＋強い、－弱い、±中立を表すものである。また、括弧をつけた所は、程度が曖昧で区別の判断が困難であることを示している。

＜資料＞

若松賤子訳(明治21)「小公子」女學雑誌所収→(小)
美妙斎(明治21)「さすがに雙紙」女學雑誌所収→(さ)
石橋忍月(明治21)「都鳥」女學雑誌所収→(都)
眉山人(明治28)「書記官」太陽所収→(書)
伊香保(明治28)「夜の鶴」太陽所収→(夜)
川上眉三(明治34)「左巻」太陽所収→(左)
江見水陰(明治34)「東京病」太陽所収→(東京)
内田魯庵(明治35)『社會百面相』東京博文館

＜参考文献＞

青山なを(1966)『女学雑誌解説』臨川書店
池上秋彦(1963)「人情本に現れた一・二人称代名詞について(1)」『鶴見女子大学紀要一号』
大石初太郎(1974)「敬語の本質と現代敬語の展望」『敬語の体系・敬語講座 1』明治書院
鹿野正直(1961)「『太陽』－主として明治期における－」『思想』450号 岩波書店
国立国語研究所編(1990)『場面と場面意識－国立国語研究所報告102－』三省堂
小島俊夫(1974)『後期江戸ことばの敬語体系』笠間書院
小松寿雄(1971)「近代の敬語Ⅱ」『講座国語史5敬語史』大修館書店
笹淵友一(1973)『女學雑誌・文學界集明治文学全集32』筑摩書房
塩澤和子(1998)「『古今集遠鏡』における一人称代名詞」『文藝言語研究言語篇』34号

筑波大学文芸・言語学系紀要

- 鈴木貞美(1996)「創刊期『太陽』論説欄をめぐって」『日本研究』13集
国際日本文化研究センター紀要
- 鈴木正節(1979)『博文館「太陽」の研究』アジア経済研究所
- 田中章夫(1983)『東京語－その成立と展開－』明治書院
- 辻村敏樹(1971)『敬語の史的研究』東京堂
- 時枝誠記(1950)『日本文法口語篇』岩波書店
- 南不二男(1974)他「敬語行動の諸条件」『敬語の体系・敬語講座1』明治書院
(1984)「場面論の問題点」『言語のダイナミックス言語社会学シリーズ6』
文化評論出版社
- 仁田義雄(1991)「言表態度の要素としての〈丁寧さ〉」『日本語学』10-2 明治書院
- 野田尚史(1998)「「ていねいさ」からみた文章・談話の構造」『国語学』194集 国語学会
- 野辺地清江(1984)『女性解放思想の源流－巖本善治と『女学雑誌』－』校倉書院
- 湯澤幸吉郎(1954)『江戸言葉の研究』明治書院
- 山崎久之(1963)『国語待遇表現体系の研究近世編』武蔵野書院
『増補本居宣長全集・第七』(1927)吉川公文館
『日本近代文学大辞典・第五 新聞・雑誌』(1977)講談社